
荒天の座標

藍澤榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒天の座標

【Nコード】

N0378H

【作者名】

藍澤榊

【あらすじ】

一人の師の元から、二人の弟子が、戦乱の世へ旅立った。二人は別々の道を歩み始める。数年後、一人は軍師として、一人は宰相として、各々の国のために尽くしていた。寡黙で不器用な兄弟子軍師と、姉体質の謎多き宰相の、やや中華風ファンタジー。前半シリアスダーク、後半ほのぼのシリアスの予定。

ぎりぎり唇を噛んで嗚咽をあげる。

私が軍師に上り詰めて間もない頃、ひよんなことから、胸騒ぎのする情報を手に入れてしまった。呉にいる劉遷が、宰相となった、というその事実面に直面した時、私に生々しい記憶が蘇った。そして、沸々と沸き起こる感情。

劉遷。それは、私の弟弟子であり、そのくせ、私よりもいつだって遙かに優れていた。書を覚えるのも早く、理解も早く、意見も私よりずっと素晴らしかった。

仲が悪いと言っ言葉があるが、私と遷の間には、仲の良さも悪さも無かった。仲が無かったと言っても良い。私は遷が嫌いな訳ではない。憎たらしいのだ。素晴らしい才能と人格を持ち合わせ、何の落ち度も無い遷のことが。

「呉の宰相か……」

私は筆を置き、目の前の使いを見た。どうしようもない感情が沸き起こっても、今はどうしようもない。この所為で職務に支障が出たら、本末転倒だ。

再び書面に向かい合おうとした私の顔を、使いは見た。

「炎先生、如何なさいましたか」

「何でもない」

顔も上げずに即答する。さっさと退室しないかと思いつながらも、それは口にしない。すぐに手で行くことだろう。

しかし、使いは退室しなかった。

「唇から、血が……」

そう言われて初めて、私は唇に血が滲んでいることに気付いた。此処まで堕ちていたとは、と心の中で、自嘲する。

「切れてしまったようだね。見苦しい物を見せた。申し訳ないね」
ぺろりと唇を舐めれば、広がるのは鉄の味。

顔を上げて微笑むと、使いは我に返ったのか、慌てて返事をして、

一礼した。

退室する使いを見届けてから、私は鉄の味が滲む口元を、手で擦った。白い手には、べったりとした赤が広がっていた。

殺したい衝動に耐える苦痛。

郭が呉に攻め入る。郭の王、縦王は、呉へ軍を進めることを決めた。時は戦国、当然多くの国がある。燕も多くの小国と、国境を共有している。

「よりによって、呉国か」

ぼそりと零し、仕事の為の筆をとる。静かな空間だ。

関わらなくて済むこともあるだろう。遷の存在を忘れようとして、忘れかけていた矢先だった。当然負ける気はない。

私は今まで、重臣を殺すように指示することは無かった。むしろ、郭の兵士には、殺すのは兵士のみ、と堅く言って聞かせた。無駄な殺傷は避けるべきことだ。

しかし、遷がこの戦で死ねば、もう私が苦しむことは無い。遷を忘れ去り、遷という存在に呪縛されずに済む。

病んでいる。そう、この気持ちこそが遷に縛られている。私の職務と遷は関係ない。遷は宰相、私は軍師。関わることもない。私は、ただ、呉の国の軍を攻略するために、策を練るだけだ。

しかし、殺す機会を与えられた。それは、今の私にとっては大きすぎた。私は、異様な程に沸き立つ心を、必死に押さえ込もうとした。しかし、その抵抗も空しく、私は筆を置き、ゆっくりと部屋を出るといふ選択肢を採らざるをえなかった。

小鳥は優しく鳴く。私は澄んだ空気を吸いながら、その小鳥を見た。その小鳥が、憎たらしくて仕方が無かった。

「炎」

ふと、後ろから声がかけられる。優しい女性の声。

「昭妃様、如何なさいましたか」

昭妃。縦王の美しい王妃だ。品の良い簪で豊かな髪を操り、静かに留める。着物は、薄らと模様が織り込まれた、華やかな紅色。一国の王妃が、軍師に一体何の用があるのか。私は丁寧に見つめた。

「次の戦も必ず勝つてね」

昭妃は微笑んだ。しかし、その眼光が鋭く光ったのを私は見逃さなかつた。

「勿論ですが。何故、突然、そのようなことを……」

「あの国の宰相には恨みがある」

昭妃が笑みを絶やすことは無かつた。

動揺しているのか、ぐらりと何かが揺れた気がした。それ故、残像で歪んだ王妃の顔は、あまりにも醜かつた。

失礼しました、と私は一礼し、その場をそそくさと立ち去つた。

頭の中を占めるのは、遷の笑顔。どちらにしる、遷は殺されるのだ。安心すべきことだ。しかし、何かがさらに揺れ始めた気がした。

愛より憎しみを取る勇気を下さい。

昭妃は、何故、遷に恨みがあるのだろうか。昭妃と遷に、接触は無いはずだ。

しかし、よくよく考えてみれば、私は、遷が師匠、韓羽先生の弟子になるまでのことをほとんど知らない。韓羽先生は、遷について何も話さなかったし、私も何も聞かなかった。先生に遷を紹介された時も、遷は名前を言っただけだった。

韓羽先生の弟子になるまで、遷は何をしていたのだろうか。ただ、その疑問だけが、静かな部屋に漂う。昭妃は話してくれるだろうか。話してはくれないだろう。それ以前に、それを知ったからといって、私に何の得も無い。

厚い布が、頭の中を駆け抜ける。その所為だろうか。酷く心が息苦しい。

「死んで欲しくは無いんだ」

自分の話を聞いてあげるかのように呟く。遷には、死んで欲しい。私はそう思っているはずだ。でも、それは死んで欲しいほどの恨みではないのかもしれない。ただ、遷という存在に縛られている自分を解放するために、遷を殺したいと思っているのかもしれない。

私は、遷に対して思い入れはあるのだろうか。一日中一緒にいたわけだから、当然である。しかし、そうだとしたら、私は身動きが取れない。遷から解放されることはありえない。

このまま私が職務をこなせば、遷は死ぬ。もし、遷への思い入れが私に無かったとしたら、それ以上に幸せなことは無いだろう。

今は何もしたくない。頭の中には何か違うものが詰まっている。しかし、戦争前だ。すぐに王に呼ばれることになるだろう。

私は筆を取り、地図を睨みつけようとした。しかし、墨一色の地図から、何かが浮かぶ気がしない。ただ、静かな部屋に、ざわめきが聞こえるような気がした。

死んで欲しい。違う、殺させて。

劉遷。名前を変えていたから気付かなかった。結婚を祝福しにやって来た呉の王の隣にいたのは、姉、劉白に違いない。くつきりとした顔立ち、少し低い声、穏やかな笑顔。全てが、姿を消した姉のものだった。

宰相となった姉は、呉王の隣に立ち、何食わぬ顔で私に微笑んだ。私は、その時驚いて、何も言えなかった。それでも、すぐに燃えるような何かが湧いてきた。それから、私は、ただ姉の方を睨みつけていたが、姉は呉王の隣に立ち、老いた私の夫に深々と頭を下げていた。

本当は、宰相として祝福に来た姉が、老王と結婚させられ、惨めな気持ちでここにいるはずだった。私が、他人事のような、僅かな同情を含めて、見せかけの祝福をするはずだった。しかし、実際、そうはならなかった。

私が逃げ出したために、私が王と結婚しなくてはいけなくなった。たとえ、どんなに物に恵まれていたとしても、誰が好きで、老いた王と結婚するのか。私には好きな人がいたのに、ずっと一緒になれると信じていた人がいたのに、それはあまりにも呆気なく崩された。姉と違って、私は自由に恋愛ができると言われてきた。でも、姉は逃げた。死んだと思っていた。死んでいたら許せたのに、姉は男として自由に生き、宰相という地位を手に入れ、幸せに暮らしていたのだ。だから、ああやって微笑むんだ。所詮他人事だから。許せない。姉の所為で、私の人生はめちゃくちゃにされた。

私は王に言った。呉を攻めてください、と。王は快く承諾した。敗北した国の重臣の姉を殺してやろう。宰相となるために、民を騙していたことを叫んでやろう。炎は賢い。生きたまま捕えて、私の元へ連れてきてくれるだろう。私の手で殺されないと、意味が無い。

姉をどうやって殺してやろう。私は表面だけの優しい微笑を浮かべながら、惨めな姿になった姉を想像した。晴れやかになる気持ちに、心を躍らせながら。

呟いた名前は憎むべき相手。

戦に負けた。それは、遷のことがあったからだろうか。理由は分からない。戦のことは、あまり覚えていない。今思えば、早々に軍師を代わって貰うべきだったのだろう。

私に期待してくれた縦王、昭妃を初めとする、郭の人々のことが頭を過ぎるだけで、押し潰されそうな思いがする。私は、郭の者ではないが、この国には人並みではない思い入れがある。

城へ侵入してくる呉軍。食い止めることはできないだろう。私は、縦王を探す。しかし、老体だ。希望は薄い。私は数人の兵士を連れ、呉の兵から逃げるようにして走り回った。

王の活動範囲の建物を走り回った後、私は後宮へ急いだ。後宮は男子禁制だが、この際仕方が無い。どうにかして、昭妃と接触しなければいけない。昭妃が、王の安否を知っている可能性は高い。

駆け込むようにして、後宮に入る。兵士たちも、最初は躊躇していたが、すぐに入ってきた。

「昭妃様、ご無事でしたか」

昭妃の部屋へ滑り込むようにして入る。中には青ざめた顔の昭妃が、座り込んでいる。しかし、やってきた人物が私だと分かってから、昭妃の顔に微かな燈が灯った。

「炎、良かった。ありがとう」

「王は、どこにいらつしやるか、ご存知ですか」

間髪入れずに尋ねる。昭妃は、郭の者ではない上、女である。殺される心配は無い。しかし、王は違う。つい声が荒くなった所為か、昭妃は驚いたような表情を浮かべ、分かりません、と答えた。

大人数の足音が迫ってきたのは、その時だった。私は舌打ちし、昭妃の顔は再び青くなる。兵士たちも、おどおどと私の顔を見るだけだ。

扉を突き破るように入ってきたのは無数の兵士。刃を向け、

突き進んでいこうとしている。私は諦めに近い気持ちでそれを見た。しかし、その刃がそれ以上進むことは無かった。凜とした声が響く。「この者たちは、私に縁のある者たちです」

男にしては高い声。聞き覚えのある声。忘れることの無い声だ。兵士はざわめきながら、ゆっくりと端による。私は目の前の事実が信じられなくて、ただ、何も言わずに風通る扉を見ていた。

現れたのは黒い髪を高く結った青年。呉国の宰相、劉遷、本人だ。周囲の兵士に比べて、格段と身長は低い、ひ弱な雰囲気は無い。むしろ、小柄で細めの体が、ある種の威厳を持っている。

「遷、何故ここにいますか」

そう尋ねても、遷は穏やかに笑っただけだった。

全身全霊をかけて敵の命を追う。

特徴的な穏やかな笑顔を久しぶりに見ると、憎たらしいと言う気持ちや忘れてしまったかのような心地がする。その瞬間に全てから解放されたような、安心感に似た喜びがあった。

遷は兵士たちを退出させた。敵も味方も。ざわざわと兵士たちが出て行ったのを確認してから、遷はパタリと戸を閉める。久しぶりと相変わらず笑顔を浮かべている遷の視線は、昭妃の方へいった。

「お前は、何故逃げた」

昭妃の突然の低く太い声に私は驚き、思わずその美しい顔を凝視してしまう。白い顔に浮かんだ苦々しげな表情は、昭妃のものとは思えない。そういえば、二人には因縁があった、などと呑気に思い出している状況では無かった。

張り詰めた空気に、遷の笑顔だけが浮いている。遷は答えようとしない。堅く、昭妃の唇が結ばれる。そして、昭妃は、その懐にゆっくりと手を当てた。

一瞬だった。金属音が鳴り響く。昭妃の短剣と、遷の錫である。

昭妃は、狂ったように叫び声を上げ、遷に斬りかかるようにする。私は急いで、後ろから昭妃の体を押さえ込んだ。

「お前は、お前は……」

あまりの感情に、言葉が出ないのだろうか。昭妃は、涙を流しながら暴れていた。私は必死で昭妃を押さえ込む。短剣を持つ手を掴み、動かないように固定する。

遷が立ち上がった。影が差す。私は短剣を持つ手を止める力を強くする。すると、重い衝撃とともに、昭妃の力が抜けた。すかさず短剣を手に取り、自分の隣に置いてから、昭妃を抱きとめた。

昭妃の懐に拳を入れた遷は、ぐったりと私に凭れ掛かっている昭妃を見下ろしていた。その眼光是、鋭くも冷たくも無い。諦めに似たような、優しさのある目だった。

すぐに折れてしまいそうな儂さを持つ美しい王妃は、あれだけの憎しみを募らせていた。優しい笑顔の下で、あれだけの炎を絶やすことなく燃やしていた。突然の自体に惑わされ、憎しみを忘れてしまふ私とは違う。昭妃は、あまりにも幸薄い。

私は遷を見た。ただ昭妃だけを見る遷の口元が、ゆっくりと動いた。

恋より持続性の有る憎しみの焰

「悪いね、昭」

遷はしゃがみこみ、私の手から、慈しむように、昭妃を抱き取った。それには、命を狙われたことに対する、恐れも怒りも全く無い。穏やかな笑みは幸せそうだった。

「昭妃様と、何かあったのでしょうか」

私は、できる限りの淡々とした声で、遷に尋ねる。昭妃の恨みは尋常な物ではない。しかし、対する遷は、昭妃を愛しげに見つめる。一体何があったのだろうか。

「無いわけではありません」

遷は昭妃を離さない。それは分かっている、という言葉が口が出る。しかし、話したくは無いのだろう。諦めに似た笑みを浮かべた顔が、そつと伏せられる。

「昭は私を恨み続けようとするでしょう」

遷は、昭妃に微笑みかけた。そして、その時、静かに戸が開いた。遷は昭妃を抱きかかえたまま、するすると戸の方へ移動する。僅かに開いた戸の隙間から、垣間見えるのは、呉の兵服である。戸に耳をつけるようにして、兵士の報告を聞いているのだろうか。私は嫌な予感がした。

「郭王がお亡くなりになったようです」

私は体の力が抜けるのを感じた。王は、私が殺したと言っても過言ではない。今まで、抑えていた何か爆発する。

「昭は実家へ帰しましょう。あなたのごことは、善処致します」

今は、自分のことなど、どうでも良かった。私は、遷の言葉が、自分とは遠く離れた位置にあるように感じた。ただ、酷く息苦しい。締め切った部屋の所為だろうか。

それからは早かった。郭の兵士を皆捕え、その日、呉軍は王宮で寝泊りすることになった。郭の重臣の多くは殺されていたため、遷

は私の近くの部屋で一夜を明かすことになった。

寝床に入ると、薄明かりの中、見えなかったものが見えてくる。この国を滅ぼしたのは他ならぬ私である。だから、私が死ぬべきなのに関わらず、自分は命を救われた。死にたいわけではない。

暫くすると、別の感情が湧き出てきた。劉遷。いつだって、私の大切なものを奪い続けるのに、何故か最後には私の命を助ける。だから、私は繰り返さなければいけない。大切なものを失い、自分は救われ、また大切なものを作っては失い、自分だけ命を救われる。

遷は、私に優しくかったし、私を助けてくれた。だからこそ、その恨みが、酷く愚かなことに、自分でも気付いてしまう。私は未熟で、あまりにも愚かだ。何の落ち度も無い弟弟子に、嫉妬だけの恨みを向けるのだから。

私はついに耐えられなくなった。私は、むくりと起き上がり、そのままの足で戸を開け、廊下に出る。まるで、足だけが動いているかのような感覚だ。意識は別のところにあった。ただ、この苦しみから解放されたいと思った。

その足が向かった先の戸は、運が良いのか悪いのか、鍵がかけられていなかった。

憎しみを忘れないために刻んだ証。

息苦しい。世界が赤くなっていく。夢にしては苦しすぎる。私は、薄らと目を開けた。

真つ暗な部屋の僅かな明りに照らされて、ぼんやりと浮かんでいるのは、炎の顔。目は虚ろで、ただ私の首を締めている。こんなところで死ぬ気はない。しかし、無駄に抵抗しても敵うはずが無い。炎は男だ。私は賭けに出た。不動の状態から一気に足で、炎の腹部を蹴り上げる。うろたえた所に、一気に手套を打ち込む。勢いよく倒れてきた体に、押し潰されながらも、私は生きていることを確認して安堵のため息を吐いた。

「私は何故、こんなに嫌われるのでしょうかね」

一日に二度も殺されかけるなど、呆れ笑いさえもできない。私自身に護身術の心得があり、相手に無かったかからどうにかなったが、双方共に命を失うところだった。

「ごそごそと、炎の体の下から出できるようにして抜け出す。」

「炎、黙っていてごめんね」

当然返事はない。連日の職務と心労で疲れているだろう体に、布をかけてやる。自分の寝床だが、しょうがない。

私は、炎より年上だ。三年ほど人生の先輩で、韓羽先生に弟子入りする前に二年ぐらい他の先生についていたから、炎より何でもできるのは当たり前。でも、私はそれを言わなかった。炎が、私よりも劣っている、と悩んでいたことも知っていたのに関わらず、それを言わなかったのは、私が悪い。

炎は、自分の命を救い、導いてくれた韓羽先生を慕っていた。でも、韓羽先生は、元からいた炎よりも、学問が炎よりもできる私に構うようになつた。炎への対応も冷たくなっていったことに、私でさえ気付いた。それでも、私は先生から、できる限りを学び取るうとしていた。だから、炎のことを、一番には考えてやれなかった。

あくまでも、二番目だ。

しかし、若くして立派な一国の軍師になり、誰もが羨むような名誉を手に入れた青年が、未だに引き摺り続けているとは、誰が考えるだろうか。

真面目故、炎は不器用だ。今まで誰にも話さず、自分の中に溜め込み、それを抱き続けた。一途だ。真面目すぎる。だから、捨てることができなかったのだろう。

「手の掛かる妹が既にいるのに……弟までいるとはね」

安らかな寝顔に手を翳す。起きたら驚くだろう、と思い、思わずにやりと笑ってしまう。

顔立ちはもう大人だし、当然、私よりも体はずっと大きい。それでも、炎は、おそらく向こうはそうは思っていないなかったとしても、私にとっては弟だ。

今まで、炎には酷いことをしたと思う。だからこそ、たとえ自己満足だったとしても、これからは、炎のためにやれることをやろう。私は明りを頼りに、鏡の前に立った。揺れる炎に照らされた首元に、くつきりと残った爪痕は、未だに酷く痛む。でも、これは、不器用な弟の、精一杯の反抗だと思って、ありがたく受け取っておこう。

唇を伝う鉄の味が全てを活性化させるように。

起きた時に、口の中がまったりとしている、ということとはよくある。しかし、起きた時、血の味がするのは初めてだ。私は起き上がる。目を擦り、ぐるりと周囲を見渡す。そこは、私の部屋ではなかった。

冴えてきた頭で、慌てて昨日の夜のことを思い出す。夢と現実の境が無い。どこまでが現実なのかは分からない。何か体が中で騒ぐ。しかし、昨日の遠いところにあるような記憶から分かるのは、ここは、遷の部屋であるということだ。

となると、遷はどこにいるのか。私は何故ここで寝ているのか。一体何をしたのか。一人の所為だろうか。考えは悪いほう悪い方へと転じていく。私は立ち上がり、部屋から出た。向かう先は自分の部屋だ。

廊下はひんやりと冷たかった。爽やかな朝ではあった。それを堪能する余裕は全く無い。むしろ、それが更に私を焦らせた。頭の中でひしめき合う何かに、押し潰されそうだ。

私は戸を開けようと、手をかけた。しかし、戸は開かない。鍵が掛かっている。鍵を探すように、袖の中に手を入れたが鍵は無い。焦る気持ちを抑え、軽く戸を叩く。

中で物音がした。そして、すぐに戸は開いた。

「おはようございます。大丈夫でしたか」

既に、しっかりとした衣を纏った遷は、慌てたような驚いたような表情を浮かべ、私に尋ねた。私は、それを質問で返す。

「私は昨晚何を……」

自分でも、声が震えているのが分かった。遷は微笑む。

「私の部屋に来て下さった時、具合が悪かったようで、倒れてしまったんですよ。ですから、私が炎の部屋使わせて頂きました」

私は、ゆっくりと息を吐いた。体から力が抜け、頭の中を僅かな

風が通った。

「すみません。ご迷惑をお掛けしましたね」

普段の落ち着いた声で、出来る限り丁寧に謝ると、遷は優しい笑みを浮かべた。

「体調が優れない時は、お互い様です」

そう言ってから、一度、言葉を切る。そして、僅かに顔を強張らせた。

「今日、呉の国に戻ります。大丈夫ですか」

私は頷いた。全てを受け入れる覚悟は出来ているはずだ。私は国を滅ぼし、王を殺した罪人だ。怖い。そう思うが、それを出さないようにするのは、郭の国の軍師としての最後の仕事だ。

本当に死ぬかもしれない。しかし、生き延びることが出来るかもしれない。それは、まだ分からない。ただ、一つ分かることがある。それは、どちらにしろ、私は変わるだろうことである。

「ですが、私にできることはします」

はっきりと遷は言った。口元は緩められたが、声は力強かった。

決して大きな声ではない。低い声でもない。しかし、包み込むような深さを持つ声だった。

では、と部屋に戻ろうとする遷に尋ねる。

「何故、私の命を助けたのですか」

遷は歩みを止め、振り返った。ふらりと衣が揺れる。

「韓羽先生亡き後、あなたしかいないのですよ」

遷の言葉に、私は自己嫌悪に陥った。私が遷の立場だったら、遷のように声をかけてやれたらどうか。答えは問う前に決まっているような気がした。しかし、それを思っても、遷が喉につっかえるのだ。

ふわりと微笑んだ遷のその穏やかな笑顔は酷く悲しげで、何故か崩れてしまいそうな色を孕んでいた。顔を上げて、それを見た時、じわりと、と私の中で何かが動いた。

殺す瞬間の夢を見て思う一つの情

私は、呉の国から連れてきた医者に昭を任せていた。しかし、呉へ戻る前に、昭とは向き合っておかなければいけない。私は、医者の部屋に向かつてゆっくりと歩いていった。

昭は可愛い妹だ。私は、昭が好きで、昭のことを大切に思っている。私も私なりに考えていたのだ。私は、昭が、富や権力のある人と結婚して愛され、更に美しくなることが、幸せだと思っていた。

昭は、幼い頃から髪をしっかりと結び、美しい衣を纏うことを好んだ。だから、いつも綺麗だった。両親に気付かれぬよう、父の書齋で書物を読み漁っていた私とは大違いだ。知識と性格が相成って、男を立ててやることのできない私は、王妃になる資格など無かった。しかし、昭は男の言うことにも、素直に従う。

両親が、昭を妃にしたいと思っていたことは、前々から知っていた。どう考えても、私よりも昭の方が妃向きだ。昭が生まれると思っていなかったため、第一子を妃に、と言っていたのだろうか、昭を妃にすることで、私が傷つくとも思っていたのだろうか。理由は定かではないが、娘への愛など深い部分では無いところで、私の存在を疎ましく思っていたことには間違いは無いだらう。私は邪魔者だった。

何故、昭が私を恨んでいるのかが分からない。だから、昭と話をしに行く。私は、医者部屋の戸を開けた。

昭は起きていた。入ってきた私のことを、ぼーっと見つめている。私は医者に丁寧な礼を言うと、すぐに席を開けてくれるように頼んだ。

医者が出て行ったのを確認してから、私は昭の隣に座る。昭は何も喋らない。私は、大きく息を吸った。

「昭、姉さんはね、昭が王妃になれば、昭の力が一番発揮できて、昭が幸せになれると思ってた」

昭は、目を丸くして私を見た。未だに、不審な色は消えなかった。しかし、それは少しずつ薄れていった。昭はそのまま口を開いた。「姉上、私は姉上と違って、多くの人の役に立ちたいとは思っていないのです」

次は、私が驚く番だった。思わず目を細め、昭の顔を見てしまう。「母上と、父上と、邦様と、幸せに暮らしたかったです」

昭の目が、ひんやりと光った。

何故、こんなに単純なことに気付かなかったのだろう。私は自分を責めた。もし、このことに気付いていたとしても、私は家を出ただろう。しかし、何か妹に向けた配慮ができたはずだ。

「姉上、何ていうことをなさったのですか」

涙を浮かべ、それでもしっかりと私の方を見据えて、昭は言った。「私が、どれだけ姉上を恨んでいたことか」

何かが漸く解き放たれたかのように、昭の涙が頬を伝った。

「何度も、あなたを殺している夢を見ました」
その声は悲痛に満ちていて、手を伸ばそうとしても、どうしてやることもできない自分が、齒がゆかった。

「姉上、私は悪い人間なのでしょうか」

昭は、ついに顔を手で覆って声を上げて泣き始めた。私は、引き寄せられるように昭に近づいた。そして、昭の綺麗な髪に手を乗せる。

「ごめんね、昭。こんな姉で」

出来る限りの平静を装うようにして、私はゆっくりと言った。

「呉に着いたら、昭が実家に帰れるように手配する」

それが罪滅ぼしになるとは思えない。でも、私にできることはそれだけだ。それだけ言って、ゆっくりと昭から離れる。扉に手をかけたとき、昭のか細い声が微かに聞こえた。

「姉上、姉上の活躍をお祈りします」

昭と顔を伏せている。私は微笑んだ。

「昭、ありがとう」

たとえそれが本心では無かったとしても、私はそれで良かった。昭が私を許すことは無いだろう。私は、許されない罪を犯してしまった。奪ってしまった絆と時間は、元には戻せない。

ふんわりと吹きぬける風は、新鮮ではなかった。朝の気だるい匂いを孕み、城を駆け巡る。

飲んだ言葉を吐き出して欲しいのに。

炎は許された。進言をしたのは自分だが、正直、驚いた。若き呉王は生き残った他の者たちにも、寛大な措置をとった。

郭の国を治める。そのためには、亡き郭王以上の政治を執り行わなければいけない。そのことを、陛下は十分に理解していた。若いながらも、素晴らしい王だと思う。

「そういうわけで、私の補佐をやって頂きます」

目の前に座る兄弟子に言うと、驚いたのだろうか。普段は細い目を丸くした。

炎は、呉の国に着いてから、騒ぐことも無く、宙に浮かんでいるかのようにだった。溜息を吐いたり、意味も無く歩き回ったりすることとは無い。天を仰ぎながら、何かを考えているかのようにだった。

そんな炎の、生きた表情が見ることができて、私は満足だった。「郭の能力ある重臣は、領土拡大に当たっての異動もありましたので、適当なところへ入れさせて頂きました」

勿論、固まらないように上手く分けた。一応、敵国の重臣だった者である。謀反を企てぬよう、十分な注意を払ったつもりだ。そして、炎を近くに置いたのは紛れも無く、近くにいて欲しかったから心配なのだ。

炎は、何か考えているのか、僅かに俯きつつ、黙り込んでいる。しかし、すぐに、ふと顔を上げた。何かを言おうとしたのだろうか。「どうして……」

ぼそりと呟かれる低い言葉を聞き返そうとすると、炎は慌てた様子で言った。

「すみません。お取り計らい、ありがとうございます」

何を訊きたかったのだろうか。尋ねてみても、ただ炎は礼を言うだけだった。私は諦めた。

もう、春は盛りだ。ふらりと外に出ると、一羽の小鳥が、木の枝

にとまっているのが見えた。ふわりともう一羽が、すぐ隣にとまる。すると、最初からいた一羽は、首を傾けながら、きよるきよると周囲を見渡し始めた。

二羽の小鳥の周囲には、多くの木の枝がせめぎ合っていた。

君が愛想を振り撒く悪夢。

郭の国を入れての税率の再計算、郭の国にあった優良な法の導入など、最近は非常に忙しい。さらに、連日他国の重臣たちがやって来る。当然、遷は接待をしなくてはいけないし、王の謁見の時も、傍に控えなくてはいけない。毎度毎度、王への助言もしなくてはならない。

最後に寝たのはいつだろう、と考えたまま、未だに解けない緊張感と、疲労による脱力感を抱えながら執務室に戻ると、補佐の炎がお茶を入れて待っていた。いつものように、黙ったままだ。軽く礼を言い、深い味のするお茶を飲む。頭は重いが、湿った暖かい空気は心地良かったし、お茶も毎度の事ながら美味しかった。

しかし、いつもは自分の仕事に戻ってしまう炎が、今日はずっとこちらを見ている。何かあるのかな、と思つて、口を開こうとすると、炎は私に尋ねた。

「疲れているのですか？」

お世辞にも、敏感だとは言えないような炎に、気付かれるとは、余程疲れた顔をしていたのだろう。炎の声は決して優しいものではないが、いつものように、真剣な声だった。

「ありがとうございます」

思わず口元が緩む。私がそう言つても、炎はにこりとも笑わなかったが、私の顔を再び見て、口を開いた。

「何か甘い物でも持ってきてみましょう」

炎は、そう言つて、すたすたと部屋を出て行くこととした。私はあまりの炎の気遣いに、開いた口が塞がらない。炎が私を気遣ってくれるなんて、どれだけ私は疲れた顔をしているのだろう。

「ある意味悪夢ですね」

あまりの思いに、思わずそう言ってしまうと、扉に手をかけていた炎は振り返った。

「何か言いましたか」

きよとんとした顔で、首を傾げる炎に、私は笑いをかみ殺すようにしながら、何でもありませんよ、と答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0378h/>

荒天の座標

2010年10月8日12時34分発行